

「道徳の時間」の指導の在り方

「道徳の時間」においては、年間指導計画に基づき、子どもや学級の実態に即して適切な指導を展開することが大切である。そのために、学校の全教師が道徳の時間の特質を踏まえ、次のような指導の基本方針を踏まえて指導する必要がある。

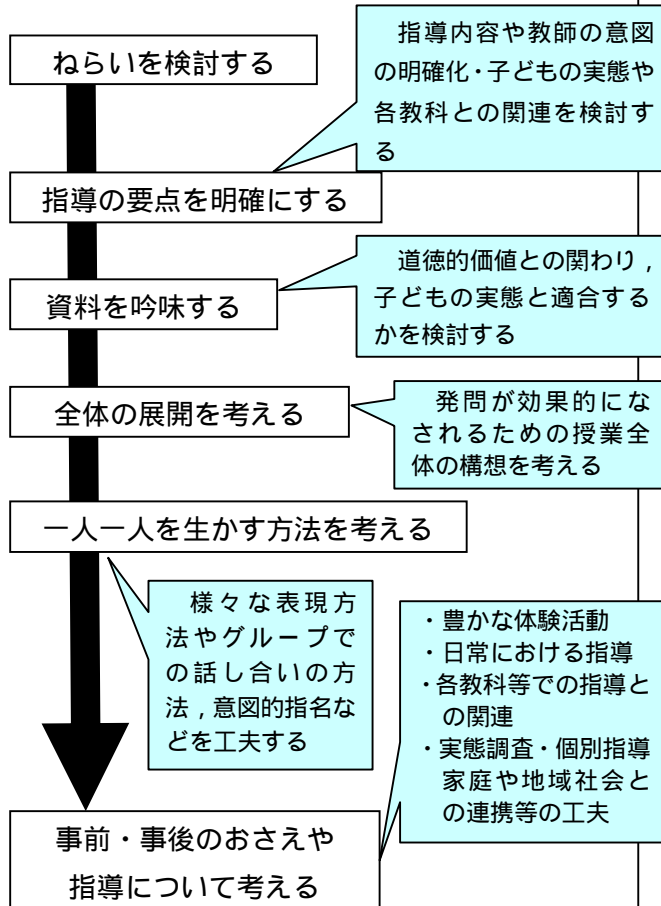
< 指導の基本方針 >

- (1) 「道徳の時間」の特質を理解する。
- (2) 信頼関係や温かい人間関係を確立する。
- (3) 児童が自己への問いかけを深め、未来に夢や希望をもてるようにする。
- (4) 児童の発達や個に応じた指導を工夫する。
- (5) 「道徳の時間」が道徳的価値の自覚を深めるかなめとなるよう工夫する。
- (6) 児童と共に考え、悩み、感動を共有し、学び合うという姿勢をもつ。

(小学校学習指導要領解説 道徳編から)

1 「道徳の時間」を構想する

< 学習指導案作成の主な手順 >



子どもの心に響く 道徳の時間をつくるポイント

子どもの悩みや心の揺れをとらえる

- ・ 日常観察や調査で悩みや心のゆれを把握する。

心に響く資料を選び、開発する

- ・ 感性に訴え、生きる喜びが与えられる資料を選ぶ。

資料の生かし方を工夫する

- ・ 登場人物への共感や感動を引き出す発問を考える。

学習活動を工夫する

- ・ 体験を生かしたり、調査・取材・表現活動の工夫をする

学習の場を工夫する

- ・ 座席の形態、教室外や地域施設などでの学習を考える。

指導する時間を弾力的に考える

- ・ 複数時間の指導や主題の関連を図った学習活動を考える。

学習集団を考える

- ・ テーマ別グループ・複数学年グループなど、学習する形態を工夫する。

指導体制の充実を図る

- ・ 校長や教頭、TTや地域人材の活用など多様な指導体制を工夫する。

2 資料を工夫する

「道徳の時間」の目標の達成に向け、子どもに充実感をもたらす指導を進めるためには、子どもの心に響く資料を選択し、多様な資料の開発と効果的な活用に努めることが大切である。

(1) 資料を選択する

資料を選択する際には「道徳の時間」の目標を踏まえ、「子どもの心に響き、心を揺さぶる資料」や「感動性が豊かで、生きる喜びや勇気が与えられ、人間としてよりよく生きていくことの意味を考えさせる資料」などを選択することが大切である。

魅力的な資料を選択し開発するポイント

- ア 資料を副読本だけでなく、文学、時事問題などに幅広く求める。
- イ 子どもとともに考えたい問題やテーマに照らして、資料化できそうなものを普段から収集し、ファイルしておく。
- ウ 資料の表現形式を、読み物の形に偏りすぎないようにする。
- エ 校内や地域の素材を生かした資料や郷土資料をつとめて発掘する。
- オ 資料・素材コーナーを整え、全教師の収集への意識を高める。

(2) 資料を分析する

資料分析は資料に含まれている道徳的価値や関連する道徳的価値の構造を明らかにし、本時のねらいの達成を目指し、中心的な発問等を構成するために行う。

資料の場面の展開に即して、心情の変化などをとらえる方法（物語資料など）

資料の主な場面・主人公の言動・主人公の心の動きから、価値内容を押さえ、子どもに気づかせたいこと・効果的な発問などを考える。

資料に対する子どもの受け止めやとらえを中心にして分析する方法

（一枚絵や写真など、子どもが内容を自由に受け止め、考えることができるもの）

子どもの感じ方・考え方などを予想し、資料の核となる部分や、予想される発問を考える。

資料分析例（資料場面の展開に即して心情の変化などをとらえる方法）中学校2学年

主題名 生命尊重3 - (2) 資料名 「死せる子 生ける子」

資料について 旭川市に在住する詩人が、子どもを授かりたいと何度も妊娠を経験し、ついに小さな命を手にした喜びと医師の心に響く言葉を綴った資料

主要場面（事実）	主人公の心の動き	気づかせたいこと	発問
結婚して初めて授かった子どもの死と藤田医師の言葉。	重く哀しい気持ち。落胆の底にある。自分を失っていた。	母親の深い悲しみ 言葉とは裏腹な医師の気持ち。	なぜ藤田医師はあんなことを言ったのだろう。
その後二度妊娠し、子どもを失った。そして医師に浴びせた言葉。	のろいたような気持ちと深い悲しみ。	それだけ子どもが欲しかったということ。	何回も妊娠しているということはどういうことか。
四度目の妊娠と大量出血。	生みたいという気持ちをなくしていた。	過去の経験が、心に重くのしかかっているということ。	この時の東さんの気持ちはどんなものだろう。

3 発問を工夫する

発問は、子どもの心を動かし、多様な考えを引き出すために重要である。特に、子どものこだわりや問題意識が生かされる発問、発言に自由度がある発問、考える必然性や切実感があり、心が揺さぶられる発問などを考えることが大切である。

(1) 基本発問 (ねらいを達成する上で基本となる発問)

資料の流れを学級全体で共有し、子どもの体験に戻して考えさせる発問
ねらいに対して最も骨格的な部分での発問
主人公の物の見方や考え方の中心部分での発問
子どもの実態と照らした共通点や相違点を明らかにする発問
指導過程の中核となる場面での発問

注意したい発問例

資料の筋を追うような発問
一問一答的な発問
本音の強要を求める発問
誘導的な発問
子どもの人格を無視する発問

(2) 中心発問 (基本発問の中で、ねらいを達成するのに最も重要な発問)

ねらいにかかわって、子どもの考え方・感じ方が多様に引き出せる発問
ねらいにかかわって、主人公の考え方に至った動機や原因を共感的に問う発問
ねらいとする価値に対して、自分自身がどのように実践してきたか、どのように考えてきたか振り返らせる発問

(3) 補助発問 (基本発問や中心発問を補い、関連付ける発問)

基本発問で、子どもが理解しやすいように、かみ砕いたり、言い換えたりする発問

コラム

効果的な発問とは . . .

意図的・計画的であること

・ねらいに迫ることができる構想を考える。各段階の果たす役割が実現するように構成する。

一貫性があること

・子どもの実態をふまえ、反応を予測し、子どもの意識の流れに沿って一貫性をもたせる。

・中心発問につながり、前の発問を深め、後の発問に発展していくように関連をもたせる。

内容が明確であること

・何をたずねているのか、はっきりわかる内容にする。

考えるゆとりがあること

・発問を精選し、じっくりと考えさせるようにする。

多様な考えが出るようにすること

・反応を予測し、それを広げる工夫をする。(学習形態・グルーピングなど)

4 指導過程を工夫する

「道徳の時間」は、子どもが自分なりの問題意識をもって資料などと出会い、学び合いを通してねらいに迫るとともに、自分を見つめる目や周囲の人への共感を豊かにしていく時間である。

指導過程は、次のようなものが一般的であるが、学習内容や子どもの実態などに応じて柔軟に工夫することが大切である。

(1) 一般的な指導過程

導入：主題に対する興味や関心を深めて、学習への課題をもち、意欲を高める。

展開：資料による話し合いや自分自身を見つめることを通して、本時のねらいとする道徳的価値の自覚を深める。

終末：話し合いをまとめたり、道徳的価値に対する思いや考えを深めたりして今後につなげる。

(2) 一般的な学習過程のポイント

		役割
導 入	気 づ く	ねらい(とする価値)への方向付け ・ねらいへの興味・関心を高める。 学習への動機付け ・授業の雰囲気をつくる。 資料の解説、資料への興味付け ・時代背景・登場人物などについて簡単な補説をする。
		資料を中心に、ねらい(とする価値)を追求・把握する ・正面から資料に取り組み、主人公に託して自分の気持ちを語らせる。
展 開	と ら え る	
	見 つ め る	資料から離れて自分の生活を振り返り、自分の価値観に気づき、高める ・資料から学んだ価値と自分とを対比する。 ・現在及び将来にわたる価値観の自覚をもたせる。 ・中心となる価値にこだわらず、一人一人の気づきや思いを認め、広げる。
終 末	つ な げ る	本時の整理やまとめを行う ・実践への意欲をもたせる。 ・希望や期待感をもって終わるようにする。 ・板書の活用・教師の説話・作文や手紙・格言やことわざの読み聞かせ など。

< 発問例 >

~したことがあるか。
 ~を見たり、聞いたりしたことがあるか。
 これから~という資料を読んでいこう。
 ~という課題について考えてみよう。
 *深入りしないで、さらりと。

< 発問例 >

最も心に残った部分はどこか。なぜか。
 主人公の行動や考え方について感じたことは何か。
 主人公がそのように行動したのはなぜか。
 そのような主人公をどう思うか。

< 発問例 >

自分だったらどうするか。
 見習うべきはどんな点か。
 今日の学習から学んだことは何か。
 今後の生活で心がたいことは何か。
 主人公の行動(考え)から自分たちはどうしなければならぬと思うか。

< 子どもの考えの広がり >

こういうことをやってみるのもいいな。
 これからも自分のこととして考えよう。

5 指導方法を工夫する

ねらいを効果的に達成するためには、ねらい、子どもの実態、資料や指導過程などに応じて、資料の活用や話し合いの仕方、表現活動など、指導方法を創意工夫することが大切である。

(1) 資料提示の工夫をする・・・想像，共感をかき立て，子どもを道徳資料の世界へ引き込む

多様な方法例

- ・大型絵や紙芝居等を用いる。
- ・パネルシアターによって提示する。
- ・黒板を劇場や舞台のようにして提示する。
- ・テレビ，パソコン，プロジェクター，録音等の視聴覚機器を生かす。
- ・補助資料（実物や写真，効果音等）を生かす。

工夫に当たっての留意点

- ・工夫する点をしぼり，子どもの資料読み取りや視聴に傾注できる配慮をする。
- ・道徳資料の世界の「間」を生かして，資料提示にメリハリをつける。
- ・寓話（物語等）と実話（ノンフィクション等）のそれぞれの特徴が生きる工夫をする。

(2) 話し合いの工夫をする・・・子ども相互に多様な考えを学びあい，深め合う工夫をする

多様な方法例

- ・討論やグループ討議・代表発表などを取り入れる。
- ・構成的グループエンカウンターの手法を取り入れる。

対応の工夫例

- ・心の様子や考え，立場を色別，類別，グラフ等による視覚化を図る。
- ・多様な意見，きっかけとなる意見を引き出す意図的な指名を行う。

場づくりの例

- ・座席の配置で立場を明らかにし，意見を交わす工夫をする。
- ・教室だけでなく，特別教室やオープンスペース，校庭や資料館，図書館などで話し合う。
- ・ペアで話し合いを行う。

工夫に当たっての留意点

- ・教師が子どもの発言を繰り返すことは，必要最小限にするように努める。
- ・学級での話し合いのルールは創造的な話し合いを制約することがないように配慮する。

(3) 表現活動の工夫をする・・・一人一人の考えを引き出し，思いを一層深める

多様な方法例

- ・役割演技（ロールプレイング）を取り入れる
 - ・・・特定の役割をもって即興的演技から深める方法
- ・動作化を取り入れる。
 - ・・・動きを忠実に真似て実感的な理解を深める方法

- ・疑似体験活動を取り入れる。(アイマスク体験など)
 - ・・・セットされた条件の中での追体験的な活動
- ・劇化的活動を取り入れる。
 - ・・・台詞や演技の真似をして、状況や心情を感じ取る方法
- ・人形劇などの手法を取り入れる。
 - ・・・人形や紙人形(ペープサート)を持って演じながら語る方法

工夫に当たっての留意点

- ・伸び伸びと表現できる環境づくりと、演技の巧拙への関心に流れないように配慮する。
- ・自然で発展的な思考の深まりが逆に阻害されるような演技にならないようにする。

(5) 書く活動の工夫をする・・・個別化の中で個性的な考えが深める

多様な方法例

- ・吹き出しを付けた形式のものを使用する。
- ・自分のことを伝える手紙等を使用する。
- ・作業的、ゲーム的な内容を組み入れたものを使用する。
- ・自己評価欄を設けたものを使用する。
- ・絵や記号で書く形式のものを使用する。

工夫に当たっての留意点

- ・書く場面、書く形式、書く回数を柔軟に考え、子どもの負担にならないよう配慮する。
- ・何を書いても認められるようにして、段階的、数値的な評価にならないようにする。

(6) 板書の工夫をする・・・子どもの思考を深める共通の「ノート」として生かす

多様な方法例

- ・話し合いの中心部分をクローズアップした構成にする。
- ・意見の違いが捉えやすく類別化、類型化されて示された構成にする。
- ・黒板を劇場や物語の舞台にしたような構成にする。
- ・場面絵や、心情図、心情曲線などを生かした構成にする。

工夫に当たっての留意点

- ・右から左への川流れ的な板書を越えた「構造的な板書」を大切にする。
- ・教師の力を込めた板書だけではなく、子どもとともに作り出す自由度のある板書にする。

(7) 指導体制を工夫する

多様な方法例

- ・ティームティーチングによる指導を行う。
- ・ゲストティーチャーの協力を得る。

工夫に当たっての留意点

- ・2人の指導者によって、子ども一人一人の見方、感じ方を深く捉えるようにする。
- ・ゲストティーチャーと、指導のねらいや方法について十分に話し合っておく。

「道徳の時間」を支える学級づくり

「道徳の時間」の指導は、学級経営が基盤であると言われる。それは、子どもの道徳性はその環境に無意識のうちに影響されるからである。例えば、子ども一人一人が自分の感じ方・考え方を伸び伸びと表現できる雰囲気があり、学級の中で「自分は大切にされている」という意識がもてる学級であれば、やさしさが育つであろうし、公正で差別のない雰囲気の中で過ごしていれば、正義感が身に付くであろう。このように学級に道徳的な雰囲気があることは、子どもの道徳性を高めるために極めて重要である。

構成的グループエンカウンターとは

グループのリーダーの指示に従って行うエクササイズを通して、本音と本音の交流や感情交流ができるような人間関係を体験することである。つまり、体験活動を通して、自分や相手のことを肯定的に受容し、子どもたちの人間的な成長を援助しようとするものである。

このことは、特に自己理解や他者理解を深めるために役立つと考えられる。

構成的グループエンカウンターを活用した授業例（小学校第6学年）

<主題名> 「これからの自分が大切にしたいこと」 <資料名> 「トマトとメロン」

<ねらい> これから生きていくために大切にしたいことを明らかにする中で、自分のよさに気づく。

段階	指導の流れ	支援・留意点
気づく	1 「これまでの自分の人生を一言で言う」とのアンケート結果を見る。	いろいろな生き方があることを意識させる。
とらえる	2 資料「トマトとメロン」を読む 3 生きていくうえで、これからの自分が大切にしたいこと考える。 4 「大切にしたいこと」に順位をつけて選択する。	4人で自由に話せる時間を保証する。 自分と友達の考えの違いに着目させる。
見つめる	5 グループごと、学級全体で話し合う。 6 もう一度自分を振り返りながら、「大切にしたいこと」に順位をつける。 7 学習を振り返りながら、自分のよさに気づき、これからの生活における理想をもつ。	自分と他のグループの違いや、自分の考えのよさに気づかせる。 これからの生き方について、考えさせる。

「生きていくうえで、自分が大切にしたいこと」を考え、順位をつけたり話し合うエクササイズを通して（エンカウターの手法の利用）自分のよさに気づき、生きる希望をもつ。

